
シンパシー・マテリアル

蒼葉ハヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンパシー・マテリアル

【Nコード】

N0222M

【作者名】

蒼葉ハヤト

【あらすじ】

突如太平洋に海底火山の噴火らしきものが原因で島ができる。

その島の中央には深く穿たれた穴があり、研究者安楽希は島を研究しにいく。あらき

そこで発見したものは生命でも、現象でもなく、ただの、物質。その物質は、奇妙な性質を持っていた。

ブログ：発端－In the mini jet－（前書き）

ブログ段階ではまだ欠片もないですが本文中では残酷な表現が混じることがあります。まだ完成してはいないので随時投稿していく予定です。

プロローグ：発端—In the mini jet—

プロローグ 発端—In the mini jet—

世界を構成する元素には、近年になって発見されたものが少なくない。

人工元素と呼ばれるものも、最近の存在だ。

物質には、底が無いとさえ言われている。

その、まだ未発見の元素——物質を、一部の学者は総じて暗黒物質ダークマターと呼んでいる。

そんな物質が、宇宙には大量に転がっている。

宇宙は、いわば暗黒物質の宝庫なのだ。

「そんな本が面白いのかい？」

連続的な轟音あらきほうせいが響く中、Y字型のハンドルをやる気なさに操作しながら安楽希峰清あらかきほうせいがやる気なさに言った。

自然に垂らした銀に近い髪に、左目のレンズだけが黒に換えられている眼鏡を掛けた、顔が整っていないとただの変態に見える少年。年は10代後半にしか見えない。

狭い室内は質素とは言えず、壁や床を埋め尽くすコードやモニター、数々のスイッチやパネルがただでさえ狭い室内をさらに狭くしていた。

ソフトチェアに座る安楽希の横には、同じように座り、手には分厚い本を持っているもう一人の少年がいた。

「……暇潰しだからな」

顔を上げずに素っ気無く応えるもう一人。振動し続ける空間で本を固定するためか顔に宛がうようにして読み続けている。安楽希の場所から見えるタイトルは“未発見物質に関する見解と述懐”論文総集編”というものだった。書籍化されていないようで、出版社は

おろかタイトルすらも某ライティングソフトで個人作成したような
ごてごての明朝体だった。

「そうかい。現象には興味あるけど、他人の妄想を研究の糧にする
のはいただけないな」

安楽希がそう言った後、慣れた動作でハンドルを左に傾けた。轟音
が若干変質し、空間が左に傾いた。

「……………そうか」

一瞬だけ顔を上げたあとまた本に顔を貼り付けて、安楽希の隣に座
る少年が再び素っ気無い返事を寄越す。

空間はまだ左に傾いている。

轟音と共に。

「そうそう、本を読むのも結構なことだけれど、これから約0分と
20秒後に着陸態勢に入るから、よろしく」

安楽希がそう言った瞬間、空間の振動がほとんど消えた。
速度を落としながら滑空しているのだ。

「……………」

しかし、安楽希の隣に座る少年は寡黙なまま本から顔を離そうとし
ない。

「衝撃で頭打っても知らないよ」

その安楽希の言葉で、ようやく本の虫が顔を上げた。

音がなければ、これ以上ない程幻想的で、美しい風景だろう。

朝日が昇る寸前の、淡い光と闇の境界線が、早朝の闇を薄く照らし
ていた。

しかし、風景の余韻に浸る余裕は、そうはなかった。

ゴウ、という低音と共に、空間が激しく振動したからだ。

「ああ、ああ、あああ、あああ、あああ」

「……………」

時間にしておよそ10秒程だろうか。

空間が振動を止めて静止する。

それと同時に、安楽希は真っ先に狭苦しい場所から脱出した。続いてのそのそと降りてくるのは安楽生の隣に座っていた少年である。

「いやー、やっと着いた。台風の予報が出てたんで出発しようかどうか迷ったけど、心配するまでもなかったな」

茶色と灰色が入り混じったような地面に立って、深呼吸しながら言う安楽希。場違いな白衣で、空間の中では完全に浮いていた。

「……………はしゃぎ過ぎだ」

いつの間にかパイプ椅子を広げて読書(?)に熱中しているもう一人の少年が、邪魔だとしても言わんばかりに呟いた。

しかし当の安楽希は忠告を気にする風でもなく、少年のほうに向き直った。

「ん、そういえば君の紹介がまだだったね」

「……………? 何の話だ?」

何故今更知っている名前を聞き返す?、という目で見上げてくる少年。

安楽希はというと完全に聞く耳を失っている。

「そういうわけで霧生瑛澄^{きりゆう えいと}くん、自己紹介を頼むよ」

「……………いらん」

霧生と呼ばれた少年がつっぱねた。

「そうかい、残念だなあ。ま、いいか。気を取り直して、っと」

おもむろに巨大な日本国旗を取り出す安楽希。それを地面に力いっぱい突き刺してから、パイプ椅子の上で文学少年と化している霧生瑛澄に向かって胸を張り、

「今日からここが、俺達の新たな研究地だ!」

そう、高らかに宣言した。

数瞬後、霧生がぼたん、と読んでいた本を閉じた。

それを安楽希に放って、

「……得られる物が少なかったら、俺は帰る」

それだけ呟いて、別の本を探すためにバッグを漁り始めた。

本を手にとってから数瞬、霧生が眺めた場所——島の中心部には、巨大な穴と、放射状に広がる爆発らしき形跡が残っていた。

それを見てから一瞬何かを思い直し、胸ポケットから小型の電子メモパッドを取り出す霧生。

右手が滑らかに動いて文字を打ち込んでいく。

7月10日 .. 島に到着・研究開始

時刻 .. 日本標準時刻 AM 5..30

ブログ：発端－In the mini jet－（後書き）

初投稿です。

頭が固いとよく言われるので文章もさらっと読める感じではないと思います。

とにかく書いて経験を積んで行きたい所存です。

第一話：事故—An uncertain accident—(前書き)

何もかもが不自然な島で研究を始める安楽希と、大抵無口な研究者、霧生。研究は始まったばかりだったが、その島の誕生を基点として様々なものが狂い始める。

これは、とある非日常のワンシーン。

第一話：事故—An uncertain accident—

「おい、撤収だ！ 準備してるやつはビニールシートをかけて戻って来い！」

蒸し暑い午後、おせっかいにも冷気を与えようとしてか、グラウンドは一瞬で夕立の餌食となった。

青ジャージ姿の体育教師が大声で撤収の指示を出す中、志乃原那緒しのはらなおは限ができた目を擦りながら集団に交じって校舎の中に引き返そうと走っていた。

学園祭。

夏休み直後に毎年恒例で開催される、いわば文化祭。

志乃原を始めとするクラスの面々は、残すところ一週間となったその行事に向けて寸暇を惜しんで、というか睡眠時間すら削って夏休み最後の準備を進めていた。泊まり込みなのだ。

（まったく、何もこんな時に降ってこなくても）
軽い悪態をつきながら教室に引き上げる志乃原。髪に着いた水分を落とそうとバッグからハンドタオルを取り出す。

「あー、くそ。全身濡れちゃったぜ」

「しょうがねーだろ、あの雨じゃ」

教室の中心部では、さっきまで作業に勤しんでいた男子たちが自分以上に悪態をついている。

引き続きで集団で現れる女子。

瞬間、

（……おい、来たぞ）

（了解）

無言の了解が男子の大半の間で交わされた。

そしてそのあとに取る行動といったら、

「もう着替えちまおーぜ」

これだった。

一人の生徒の言葉を引き金に、教室にいる大半の男子が同時に体操着を脱ぎ出す。

このときの女子の反応はシンプルで、悲鳴を上げながら逃げていく者や顔を赤らめて固まる者が続出した。

「ほ、ほら、志乃原さんも逃げようよ」

教室の入り口辺りで、隈の上を擦りながら呆れていた志乃原は、逃げる集団のほうに捕まってしまった。

「え、や、ちょ、ちが……っ！」

別の意味で呆気にとられて行動不能になる。

激しい眠気も加担してかろくな反抗ができないまま、廊下を引きずられていった。

「え、ちょっと、ここは——！？」

「やっぱり私たちも着替えたほうがいーよね」

女子更衣室

引きずられていった先は、男子にとっての楽園であり地獄だった。

「ほらほら、志乃原さんも入って」

訳が解らないまま連行。

もとい、拉致。

………

………

………

10秒後

地獄の底から悲鳴が上がった。



「で、逃げたというより叩き出された、と」

「うゝ……うん」

「でも顔が女子っぽくて勿体ないから殴られたり蹴られたり引き裂かれたり潰されたりといった暴行は受けなかった、と」

「うう………うん」

「この、」

「「「幸せ者があああああああああああああああああああああああああ
あああああああつ!!!」」」

全男子が泣いた。ハリウッドで賞でも取れそうな勢いだ。

机を2個重ねた向こう側で志乃原の尋問官をやっているのは、当人の友人でありよく恋人と勘違いされる日下部雅佳くさかへまさよしという、至って普通としか表現しようのない普通の男子生徒である。

言っておくが、志乃原那緒薔薇(男)にそっちの趣味はない。

周りを取り囲んでむせび泣いている男子集団の団結した姿は某異端審問会を彷彿させる勢いだった。ただし死神フードや鎌のオプションは付いていない。半ば呆れていると、日下部がおもむろにこちらを指差してきた。

「よし、お前はいつもそんな調子で女子にすら女子と勘違いされ、今日はあろうことか楽園を垣間見てしまったわけだが」

「楽園じゃなかったと」

「「「るっさい黙れ!!!」」」

「………んん。そういうわけだからペナルティが必要だと思うわけだよ。おk?」

逆らえない問いを発する日下部。オーラがどす黒かった。

「「「ペナルティより血の報復を……っ!!!」」」

周りにはもはや問い以前に殺気立っている。ここで断ったら死ぬのは確定だ。

「……分かったよ。で、何をすればいい?」

渋々と答えると、連中が「ああん?」といった目で睨んできたが気にしない。いつもは穏やかな日下部も「いい度胸だ……」と呟いて

殺伐感ばりばりである。

どんな無理難題を押し付けに来るかと身構えた志乃原だったが、

「そうだな、手始めに俺達の食糧を調達しに行ってくれ」

「な、なんだって！？それはこの学校の成立以来誰も成し得たことが無いっていうあの……はい？」

ノリツッコミすら出来ないほどあっけなかった。

本人達曰く、「だって、お前男子のくせに重労働押し付けると何故か女子連中がキレルんだもん」だそうだ。

コンプレックスが長所になった瞬間だった。

「まあ、何はともあれ——」

日下部が黒いオーラのままで呟く。

「達成できなかったら、色んな意味で、クロス」

で、うまく言いくるめられて雨の中をパシられた。

「うっわ、最悪だ」

志乃原那緒、本日2度目の悪態。

リクエスト表とそれぞれの金を入れた袋がやけに重い。

小銭をじゃらじゃら言わせて渡された後の注文。

「焼きそばパン」「焼きそばパン」「焼きそばパン」「ジャンプ」

「焼きそばパン」……

パシりの定番がずらっと並んだ紙を広げて、憂鬱な気分になる。

途中で、着替え終わった女子も便乗してくる始末だったからだ。

ここだけで言えば全額自費負担にならなかっただけでもせめての救いだ。

しかもデザートくらいおごれと言われてためしに聞いてみたら、全員ハーゲンダッツで一致して宥めるのが大変だった。

これは余談だ。

そして最悪の意味は、もうひとつ。

「絶対、抜け出せない………」

正規の出入り口である正門は、堅く閉じられていた。

高さも相当なもので1メートルそこらの比ではなく、3人で肩車しても届くかと届かないかくらいの巨大さだ（しかも有刺鉄線付き）。だからこそ、脱出用思考が空回りする前に、非正規の脱出口を使うことにした。

要はどこにでもある裏口である。

……………（移動中）……………

「よっ、とおっ、うわ、いて」

木の枝がチキン攻撃を全身にかましてくる。身長自体が低いせいもあってかそこまで気にならなかったが、低埴木を潜り抜けた後に背中に着きまくった水滴のせいで、着替えの体操着は効果を失っていた。

それでも目指すコンビニの位置だけは何度も行っているから間違えようがない。

そして焼きそばパンを大人買いした時に店員が向けてきた痛々しげな視線は忘れられそうにない。

なにはともあれ、任務は遂行した。

問題はその後だった。

「お、こんなところにイイ女っ」

真夏のサンタクロースと化して帰路についた志乃原に吟味するような視線を向けてきたのは、不良やってます感全開の3人の男。最初に声を発したのは三連ピアスの男だった。

「ぎやははは、まじか、おう、マジだぜ、ぎやははは、ツいてんなア俺達よお」

やけにハイテンションなピンキーアゴヒゲが下品な笑い声で言う。

「おうおうおう、重そうな荷物なんか抱えちゃってえ。俺が持ってあげっからウチまで来ない？ なんてな。ぎひひ」

最後のモヒカンも含めて揃いも揃って時代の遺物だった。

「おっ、強気だね？ ぎやははは」

「やっちゃまうの？ お？」

「ぎひひ。まあ、大人しく観念しな」

にじり寄る社会のゴミ。寄り方まで全てが古臭かった。

ただ皮肉にも逃げ道が確保できなかった。

沸々とした怒りを抑えるのに精一杯だったからだ。

がし、と左肩を掴まれる。

「オトナのお遊びってモンを教えてやるよ」

モヒカンがそう言って、周りがげらげらと下品な笑い声を発する。

流石にここまで気付かれないのはもう限界だった。

「お」

「「「あア？」」」

「俺はっ！ 男だああああああああっ！」

叫びながら空いた右手をモヒカン目掛けて突き出す。モヒカンの顔面にストレートが決まった。普段も同じように扱われてたから相当溜まっていたのかもしれない、と思った。その証拠にうまく決まったからかモヒカンは鼻血を垂らしながら伸びていた。

しかし殴ったことで状況はむしろ悪くなった。

「チッ、男かコイツ！」と叫んで後ろの二人組の表情が豹変し、金

属パイプと小型の瓶をそれぞれ取り出した。

「おう、ヤル気か？ アあ？」

「カマすぞ、ツルア！？」

人外語を吐き散らしながら突っ込んでくる二人。急に頭が冷める。

思考回復。状況、死亡フラグ。

「うわやっちゃった！！」

叫んでも遅かった。

避けることができないと脳が悟ったのか、状況確認をしてしまう。

腕時計は12時17分を指していた。

（って関係ね—————！？）

そしてその隙が命取りになった。

金属パイプが頭皮を抉る。

一瞬にして痛みが爆発する。

大声で叫ぶ暇は与えられなかった。

「がアっ……………！」

倒れた直後に鋭い蹴りが脇腹に食い込む。意識が一瞬遠のいた。

「ヘッ、刃向ったことを後悔させてやるぜエ」

赤に染まる視界に見えたのは、後ろに控えていた三連ピアスが布きれに瓶の中身を染み込ませているところだった。

そのまま有無を言わずに布を顔に押し付けてくる三連ピアス。

酔のような何とも言えない臭いが鼻孔を逆撫でした。

怒りだけが空回りして、

意識が、落ちた。



教室。

「なあ、さすがに遅くないか？」

切り出したのは、日下部。

「店から出たのは監視班から報告があったぞ」

日下部の後ろでツンツンヘアのギョロ目がそう言って、窓に張り付いている男女数人に目くばせする。

「一二〇三に標的がローソンを出発したのは確認済みです。巨大な袋、水で若干透けて肌色があったこの学園の体操着。間違いないありません、志乃原です」

答えたのは双眼鏡に張り付いている微ロンゲ。周りの男女はただの野次馬らしい。

時計の文字盤は12時11分を指していた。

「単に見逃してるだけじゃないのか？」

と、日下部。

「いいえ。裏口に続く通路に入ってから出て来ていませんし、戻っ

「でもないません」

「そうか……」

この学園はそこそ広いといっても、裏口からは普通に歩いて5分もかからない。

「逃げたんじゃないの？」

野次馬の中から呟き。

「いや、そんな度胸のある奴じゃない。しかも監視班の貞松がいる。地下にでも潜らない限り無理だな」

しれっと友人をけなす日下部。

「学園周辺は熟知していますが、マンホールは専用オープナーを使っても相当力が必要です。しかも裏口への通路にマンホールは下水処理用のくつつさいものしかありません」

と、淡々と言う貞松。くつつさいの所だけ何か嫌なことを思い出したかのように顔を歪めていた。

「要は、その間に何かあったってことなのか？」

また野次馬。今度は男子だ。

「判らん。単に貞松の所為かも知れんがな」

ツンツンギョロ目が言う。言うだけ言って何もしようとしない彼に向って、日下部が、

「おい、そんなに気になるんなら確かめに行って来いよ」

そう言った瞬間、クラスの空気が一変した。

一瞬で、確認に行かなかったツンツン（以下略）が悪いような雰囲気が出来上がる。

「お、俺か！？俺が悪いのか！？」

うろたえるツンツン（以下略）。

「サイッテー」

「つーか言い訳って……友人を迎えに行くことすら放棄するなんて、やっぱりお前はそういう奴だったんだな」

「見損なっただぜ」

「つーかむしろはよ行け」

「むしろジャンプ買ってこい」

「お前ジャンプ派かよ俺は断然サンデーだねというわけでよろしく」
「私、ミルクティー飲みたくなつたなあ」

「じゃ僕はペプシNEXを」

「おいおい皆駄目だろう、ちゃんとリストアップして渡さない」と
大人が見たら、思わず教育委員会に向けたナンバーを狂プッシュし
そうな勢いで、クラスの敵意とパシリ注文が一点に集まる。

「う、おあ」

激流の汗を出すツンツン（以下略）。一同が冷たい視線で見守る中、
「うわあああああああああああつ！！」と叫びながら飛び出
していった。

発端の目下率いるクラスメイトはというと、何でこんなことにな
つたんだ？ まあいいか。という風に事をしれつと受け流していた。



「つたく、あいつら何なんだ！」

ツンツン目線で進行中。

下駄箱を出て裏口に向かうところである。

ふと上を向くと、空いた教室の窓からのぞく双眼鏡はスコップ付き
のモデルガン（対戦車用ライフル版）に代わっていた。

「どうせ弾なんて出ないだろう」

そう言った瞬間、ピシュン、と小さい音がして目の前髪の毛が数本
宙に舞った。

『ジジ……我々は銃器を持っています。でもただの22禁ガスガン
ですからご心配なく……ジ……』

とんでもなく心配だった。

しかもいつの間にか、カッターシャツの襟には紅い光が明滅する黒
いクリップが付いている。

「このヤロ、ふざけるのも大概に——」

『あ、言い忘れましたが』

クリップを外そうと触れた瞬間に発射される、白い霧。

『催涙ガスが含まれてますから。安心ください。2日間ほど痛みは引きませんが死にはしませんので』

安心できるか！

強烈な痛みを発する目元を抑えてから、前進再開。

人の背丈ほどの植木の山もどうにか越えて、志乃原が失踪したという裏口に、

「なんだ、あれは？」

涙で潤んだ目でも何となく判った。志乃原だ。

ただし、金属バットで頭を殴られて仰向けに倒れていく本人だった
が。

(ちょ、おま……!?)

鼻水を啜って目元を拭い、後ろ向きに走ってから襟元に囁く。

(こちら青木。志乃原を発見。応答せよ、貞松——)

『こちら貞松。——えーと、誰ですか？』

「俺だよ、青木だ」

(青木って誰ですか?) (ちょっと名簿見てくる——あ、あのツ

ンツンギョロ目だ) (マジか、あいつ青木っていう名前だったのか)

『……………繰り返します。こちら貞松。志乃原さんと焼きそばパン
を持って早急に引き上げてください』

「今俺のこと忘れてただろ」

『……………とにかく、急いってください。撃ちますよ』

反論しようと思ったツンツン(＝青木)だが、目の前の光景はそれを
待ってくれなかった。

脇腹を蹴られた志乃原那緒が横に2メートルほど転がっていく。い
くら男子とはいえ身体は華奢なのだ。ダメージも相当なものだろう。
なぜそんな光景に至るのか、その経緯は青木にも解らなかったが、
いかなせん同級生のピンチだ。助けないわけにはいかないと、ジャ

ンプの多読で培われた友情の精神に燈が灯る。

（待ってろよ、今————っておい、急展開にも程が———!?!?）
目の前では、ピンク色のアゴヒゲの男が志乃原の口に布を宛てているところだった。

必死に抵抗しようとしていた志乃原の手が、支えを失ったようにぐったりと崩れ落ちる。毒のはずは多分ないから、おそらく、睡眠薬系。

「お」

頭のどこかで警鐘が鳴り響く。

そして、短絡的といわれる青木の頭は突撃司令ゴアヘッドを出した。

「おおおおおおおおおおおっ!!」

走る。

金属パイプを振り上げていた三連ピアスが「んあ?」と間拔けな声を出して青木のほうを見る。

ここで——

『おりゃあっ!』

右手を突き出す青木。

『ぐああっ』

吹き飛ぶ不良二人。

『参ったか、この不良共め!』
ヤンキー

『ぐ、覚えてろよお…ッ!』

逃げていく不良。

『志乃原さん』

そっと介抱する青木。

『あ…ありがとう』

赤くなる志乃原。

しかし志乃原は男だった。

「台無しじゃ———!?!?」

現実に戻ってきた青木。さっきの妄想は絶対に人には言うまいと心に誓った。

しかしそこで、青木は武器らしいものを何も持っていないことに気付いた。

(…っヤバー!?)

冷汗が頬を高速で流れ落ちる。不良がこちらに向かって金属パイプを振り上げるモーションも見える。

距離はおおよそ10メートル弱。

脚は止まりそうにない。

(これは、やられ――――――)

そこで、異変が起こった。

不良二人――正確には伸びている一人も加えた三人の中心に、突然光が見えた。

それは青木が気付いた時にはすでに目の前まで迫っていた。

小型無線で貞松か日下部に連絡しようと思った刹那。

その考えは、爆音と共に消えていった。



再び、教室。

「おい、そのモデルライフルってどこで手に入れたんだ?」

貞松の後ろで物色する日下部。

「さすがにこれだけは言えませぬね。入手元はわかっててもエアをガスに変えたりとか、バネ連動を最強にしたりという改造をしなきゃここまで強くないんですが」

日下部にとってさっぱり分らない回答を寄越す貞松。

「へえ、どれくらいだ?」

「大声じゃ言えませんが」声をひそめる貞松。日下部の耳元に手を当てて、(うまく撃てば人が殺せます)

「ほう。しかもドッキング式でいつも通学鞆で持ち歩いてるんだらう？」

「これくらいどうってことないですよ」

ふふふ、と互いに黒い笑みを漏らして周囲を軽く引かせる日下部と貞松。

その時、下に出て行ったツンツンからの「どうせ弾なんて出ないだろう」という呟きが聞こえた。

「あれ、無線が聞こえてないみたいですよ」

「おっと、電源電源、っと」

それからちよっとした脅しと、すこし強気な脅しと、最終的に脅しなんかもしてみた。

「人を弄るのって楽しい」

満足げに言う日下部。「DSですね」という貞松の呟きはもちろん届いていない。さすがにその時だけは無線を切っていた。

「それにしても」貞松が言う「遅いですね。そろそろ裏口から出てきてもおかしくないのに」。

実際そうだった。発見したという無線を聞いてからもう1分は経ちそうだ。そろそろ

「おい、あれ———」

クラスの誰かが叫んだ。言われなくても窓際に張り付いている日下部や貞松にはわかった。

あれは、爆———

光。そして音。

ズバアアン！！という大音量。電源を入れたアンプからエレキのコンタクトを引き抜いた時よりも壮絶な音が響き、教室の空気をビリビリと震わせる。何枚かの窓が、衝撃で砕け散った。

「っ爆発だ！」

床にいち早く伏せた日下部が叫ぶ。

教室の誰もが、言われなくても分かっていた。
爆心地^{出どころ}は、裏口の近くだった。

第一話：事故－An uncertain accident－（後書き）

文が堅いといわれたので直そうとしたらむしろ稚拙にOTZ
道は険しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0222m/>

シンパシー・マテリアル

2010年12月30日00時10分発行